

エデュコ **Educo** 地球時代の教育情報誌

No.31
2013年春

巻頭インタビュー p.2

タレント・翻訳家

**ダニエル・
カールさん**



知っておきたい教育 NOW p.4

施設が離れた小・中学校における小中一貫教育の進め方は
ままつの教育は「人づくり」

きょういく見聞録 p.8

地域の歌『今日がはじまる』
静岡市立賤機北小学校

地球となかよしトピックス p.10

愛知県半田市 新美南吉 生誕百年

インフォメーション 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

被災地の子どもたちに寄り添って
宮城教育大学 教育復興支援センター

コラム 疑似科学とのつきあい方 p.15

ほっとな出会い p.16

プロ車いすテニス
選手

国枝 慎吾さん

世界でリーダーシップをとるに ふさわしいコミュニケーションを 意識することも必要です

タレント・翻訳家 **ダニエル・カール**さん

東日本大震災後、英語での情報発信や、被災地支援に奔走されています。

僕は震災時、日本に住む外国人たちのために、ニュースの見出しを一つ一つ、英訳してツイッター^{※1}で配信しました。東北には英語指導をしている後輩など、たくさん外国人の友達がいましてから。3日ぐらいは文字通り、寝食を忘れてやっています。その後、あちこちの外国人の友達から電話が入ってきた。どこまで逃げたらいいか、国外に脱出したほうがいいのか、と。何の話をしているんだとびっくりしました。CNNやBBCなどの海外の放送局が、情報をきちんと確認しないで、根も葉もないうわさ話やデマをそのままニュースとして流していたんです。日本語が堪能でない外国人たちは、パニック状態になりそうでした。ですから、日本語のニュースを英訳して、正しい情報を外国人たちに知らせることに没頭したんです。一方で、誤報や誇張の目立つ海外メディアに怒りがわいて、正しいことを訴えようと、短い動画を10本つくって、YouTube^{※2}にアップしました。

僕が今、非常に心を痛めているのが、東北に対する風評被害です。だ

から、デマや根拠に乏しい情報は、一つ一つ訂正していく。僕は、山形で英語指導主事助手を務めて以来、東北とは25年以上のつきあいがあります。東北が大好きなんだ。震災後も、何度も被災地の支援

に行き、現状を知るように努めました。デマや風評を広める人は、何が目的なのか、オラ、わかんねえすよ。根拠のない危険を広める人たちは許しがたい。マスコミも、よいニュースもたくさんあるのに、悪いニュースだと騒げて興味をひけるから、そればかり大げさに伝える傾向がある。そこはぜひ考え直してほしい。

僕のポリシーは、新聞やテレビの言っていることを、そのままのみにしないで、再確認するべきだということ。情報のソースをできるだけ多様にする。専門家たちの言い分が食い違うとき、どちらがより正しいか、他の情報も調べる。そうしてい



くうちに、だんだん真実のほうに絞られてくる。そうすれば、安易な陰謀論や、よくわからないサプリメントとか、EM菌で除染、といった話にも乗らないはず。僕は文科系だけど、放射線関係の研究発表や専門書を何千ページも読んで、科学的根拠について勉強しました。情報を発信するには、それが必要だったからです。

あらゆる種類の情報が大波のように毎日押し寄せるのが現代の社会。精査されない情報が、どんどん拡散されます。これからは、科学的根拠に向き合う姿勢や、情報の選別について、学校でも触れていく必要があるのではないかと考えています。

※1 ツイッター：140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して共有する情報サービス。

※2 YouTube：インターネット動画共有サービスの一つ。



翻訳家としても、精力的に活動しておられます。

翻訳をするときに、やはり難しいのが、日本語特有の曖昧な表現です。デリケートな表現や婉曲表現も日本の文化ですが、外国人はとまどうことが多い。主語も曖昧なことが多いですから、日本語をそのまま英訳したら、何を隠しているんだ、と、発言の真意を怪しまれてしまう表現も多いんですよ。プロの翻訳家は、日本語と外国語の表現の違いや文化の違いをわかっているから、曖昧さをほどほどにしながらか訳していきますが、一般の外国人が訳したものは、誤解を招きやすい。日本語のニュースであっても、今の時代は特に、世界の誰が見ているかわからないわけ

ですから、情報の発信時には、クリアな表現にしなければいけないんじゃないか。新聞やテレビでも、ニュースとオピニオンがごっちゃになっていることが、誤解を招く原因となっています。

例えば科学は、実験・実証を経て様々なことが定められ、「これは〇〇だ」と断定できる。だから、「〇〇という結果だと思われる」なんて表現は必要ない。でも、日本語には婉曲表現が多くて、断定できる事実でも、ばしつと言わないことが多いんですよ。「このように思っているところでございます」なんて、断定的な表現を避けて、後で突っ込まれないように逃げしておく。私はこう調べたからその結果はこう考える、と言えればいいのに、「思われます」と表現してしまう。しっかりわかっていることも曖昧に伝えるから、海外メディアや外国人に誤解されてしまう。日本国内に限ったコミュニケーションならよかったのかもしれないが、今、日本は、先進国、経済大国として、国際的にリーダーシップをとらなければならぬ立場です。国際舞台にふさわしい表現・コミュニケーションであるかどうか、とい

うことをもっと意識する必要があると思います。

これからの日本は、世界とどのように向き合っていくのがよいとお考えですか。

僕は日本に長年暮らして、日本が大好きだし、日本の文化は世界に誇れるものだと心から思っています。ただ、なかには、「伝統」を勘違いしている人もいますね。例えば、最近、問題になっている体罰なども、決して日本の伝統ではありません。

昔、日本に来た外国人が、「こんなに子どもをかわいがる国民は、世界には他にいない」という文章を多く残しています。明治の初めに日本に来たイザベラ・バードや、さらに古くはルイス・フロイスも、日本人は子どもをかわいがって、叩いたり泣かせたりしないと、言っています。日本の長い歴史を経た本当の伝統は何か、すばらしいところを再確認することが、先進国らしい先進国として、世界の中で存在感を発揮していくことにつながると思っています。日本は、アジア、インド、アフリカなど、これからどんどん成長する国々に対する、経済発展、先端技術

開発の先輩です。みんな、日本のよさを認め、日本に興味を示して、勉強をしに来ています。でも逆に、日本人も、それぞれの国に興味を示さないと、仲よくしていくことにはならない。英語ももちろん大切ですが、そういう国の言葉を話せる日本人が増えて、そこに日本人が勉強に出かけて、現地の人が日本人と直接触れ合う。そうすれば、日本人のいいところが偏見や先入観に関係なく伝わって、きっとその国の人には、日本がもっと好きになり、協力的になりますよ。

そして、英語の授業でも、先生方は、英語を使っている国や地域の文化、おもしろい話をもっと紹介してほしいですね。僕の日本語が上達したのは、日本文化が好きで、もともと日本人を理解したいと思ったから。外国語を身につけるには、広い世界に興味をもたせる、これが一番大事だと思っています。🌸

PROFILE

1960年米国カリフォルニア州生まれ。高校時代、交換留学生として奈良県智弁学園に1年間在日。パシフィック大学時代にも来日。卒業後、日本に戻り、文部省英語指導助手として山形県に赴任、3年間英語教育に従事。その後、翻訳・通訳会社を設立する他、テレビ・ラジオ等の仕事を兼務。山形弁研究者でもある。

施設が離れた 小・中学校における 小中一貫教育の進め方



東京都 練馬区教育委員会
統括指導主事 大槻 亨

練馬区が考える小中一貫教育

練馬区においては、様々な教育課題の解決に向けて、9年間の一貫した教育課程のもとで、小・中学校の連続性・系統性のある教育活動の充実を図ることが重要という考えに基づき、教育施策を進めている。平成23年4月には、練馬区初の小中一貫教育校（施設一体型）、大泉桜学園を開校した。

さらに、施設が離れている小・中学校でも連携・協力し、義務教育9年間を見通した教育課程のもとで教育活動を実施することを重要視している。大泉桜学園の開校と同時に、区内すべての小・中学校で、小中一貫教育の取り組みをスタートさせた。

施設が離れた小・中学校における 小中一貫教育をどう進めるか

(1) 小中一貫教育でめざすもの

小中一貫教育校が開校したことを踏まえ

て、平成23年度から、2年間の研究を進めることとした。隣接校を含め、施設が離れた小・中学校、22校・10グループを、小中一貫・連携教育研究グループ（以下「研究グループ」という）に指定した。

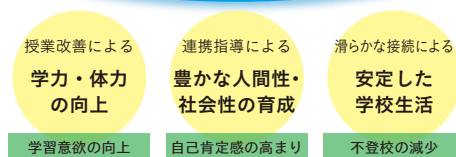
その研究の柱として、小中一貫教育のめざすものを図1のとおりとした。

(2) 具体的な取り組みとその成果

平成24年11月に、学校関係者、保護者、区民1200名の参加のもと「ねりま小中一貫教育フォーラム」を開催した。フォーラムでは、開校2年目を迎える大泉桜学園および研究グループ22校の研究成果が発表された。この稿では、施設が離れた研究グループの主な研究成果を紹介する。

① 連続性・系統性のある教育課程

練馬区が小中一貫教育でめざすこと



【図1】

小中一貫教育を円滑に進めていくためには、教育課程の多くの部分を占める各教科において、連続性・系統性を高めていく取り組みが重要である。

○教科における「課題改善カリキュラム」の作成・実施・活用

小・中学校の校舎が離れている場合、児童・生徒が直接交流するには、移動の時間がかかる。そのため、取り組み回数には限界がある。教科指導における小・中学校の連続性・系統性を高めていくためには、小学校と中学校が共通の考えのもとに、児童・生徒を指導する取り組みが必要になる。

その一つとして、まず、自分たちの学校に通う児童・生徒の学力や体力に関する課題について、連携する小・中学校の教員が話し合い、その課題を改善するためのカリキュラムを共同作業で作成し、実施することが挙げられる。こうした各学校の児童・生徒の課題に着目した改善カリキュラムを、本区では「課題改善カリキュラム」（図2、抜粋）と呼んでいる。このカリキュラム作成を契機として、教員の学力観、指導観、子ども観の共通理解が図られた。その結果として、実質的で、より高い教育効果が期待できる。

○指導方法における連携

指導方法については特に、小・中学校の教員が、意図的に一貫性をもつようにすることが重要である。例えば、ノート、板書、授業規律、話し方などについて、連携する小・中

学習期	内容	本グループの児童・生徒に身に付けさせたい理科の力（重視する事項） ⇒条件制御、推論、分析・解釈の力を重視し、表やグラフの活用に重点を置く。			カリキュラム 改善の視点
		問題解決の能力を育てること	観察の技能	実験の技能	
I期	第3学年 比較	●昆虫と植物の成長の過程や体のつくりを調べ、それらの成長のまじりや体のつくりについての考えをもつ。 ●複数の昆虫や植物の成長過程や体のつくりを比較。	●虫眼鏡を使って対象物を観察する。 ●植物・昆虫の形、色、大きさを記録する。	●実験の結果を表に記録する。	表を作成する力
	第4学年 関係付け	●季節と生物の活動や植物の成長の過程を調べ、それらの活動や成長と環境とのかわりについての考えをもつ。 ●季節ごとの動物の活動や植物の成長を季節と関係付ける。	●動物の活動や植物の成長の様子を観察し、その結果を記録する。	●温度計を正しく使って気温と水温をはかる。 ●観察カードを使った記録の仕方と整理の仕方を理解する。	表を活用して比較する力
II期	第5学年 条件制御 第6学年 推論	(略)			
	中学校 第1学年 第2学年				
III期	第3学年 分析・解釈	地球と私たちの未来のために：グラフの活用 数値での分析・解釈・表現 気候変動や生態系の変化など自然を科学的に分析し、科学技術の利用について考え、発表する。	●体細胞分裂、花粉管（顕微鏡） ●太陽（天体望遠鏡、透明半球、方位磁針）	●食塩水、砂糖水、果汁等の導電性を調べる。塩化銅水溶液の電気分解。 ●金属板や身近な素材を用いた電池。	課題を見つける力 計画的に観察・実験を行う力 自然と人間が調和した持続可能な社会をつくるための意思決定ができる力

◀【図2】

学校が9年間を通して一貫して指導していくことで、児童・生徒の学習能力を伸ばすことが期待できる。

② 児童・生徒の計画的・継続的な交流

○リトルティーチャー（異年齢集団活動）
中学生が先生役になって、小学生に様々な教科を教える「リトルティーチャー」を実施している。小・中学校の教員が共同で学習指導案を作成し、事前・事後の指導も協力して行う。中学1年生と2年生で計2回、全員がリトルティーチャーを経験する。

小・中学校相互の時間調整や移動時間の問題から、年に1〜2回程度の実施となるが、計画的・継続的に行う。幅広い異年齢集団活動により、中学生に思いやりの心が育まれ、小学生が中学生にあげられるなど、豊かな人間性や社会性が育まれ、児童・生徒の自己肯定感の高まりも見られる。

③ 教員の計画的・継続的な交流

○小・中学校教員の相互協力による指導（乗り入れ授業など）
中学校の教員が小学生を教えた

り、小学校の教員が中学生を教えたりする、乗り入れ授業を行う。現状では、中学校の教員が自校での授業を空けることになるため、定期考査の期間中などに行われることが多い。本区では、後補充の講師を入れ、年間を通して定期的に乗り入れ授業を行えるよう、支援している。

教員の交流を増やしていくことで、小・中学校教員の相互理解や、相互協力関係の構築が進み、児童・生徒の学力や体力の向上等、高い教育効果をあげることが期待できる。

〈子どもの声から〉：「前よりも英語や体育の授業に対して意欲をもてるようになってよかった。」

〈教員の声から〉：「小学校の授業を見て大きな違いに考えさせられ、自分の授業の教え方が少し変わった。」

④ 連携を進めるための学校運営

○推進組織の設置

前記①から③の取り組みを実施していくためには、学校運営における連携が欠かせない。校長・副校長同士の相互理解だけでなく、小・中学校の教員全員が組織的に連携できるような仕組みが必要である。

○小中連携推進教員「連携クリエーター」の設置

練馬区では推進組織に、連携を進める核となる、学校・地域に合った小中連携を推進する教員「連携クリエーター」を置いている。連携クリエーターは、推進組織の会議の事務局や、小中合同研修会の運営、乗り入れ授業

の準備、児童・生徒の交流の日程調整や、実施計画の作成などの役割を担う。単なる調整役としてだけでなく、義務教育9年間を見通した、新たな教育を創造していくという意味で「連携クリエーター」と名付けた。

○時間割編成（生活時程）の工夫

1時間目や、昼休みの後の、5時間目の始まるの時間をそろえるなど、時間割編成の工夫をすることで、児童・生徒や教員同士の交流が実施しやすくなる。

課題と今後の展望

図1で示した、練馬区がめざす三つのねらいを達成するためには、小中一貫教育が、日常の教育活動のなかで当たり前のこととして定着する必要がある。また、各小・中学校が、継続的・主体的に小中一貫教育に取り組める仕組みをつくることが重要である。そのためにも、これまでの小中一貫教育校や研究グループの取り組みを評価・検証し、その成果を広く情報発信して、学校・家庭・地域の理解を得る必要がある。「連携クリエーター」のさらなる育成も急務である。

小中一貫教育は、目的ではない。小・中学校が協力して、児童・生徒の学力・体力の向上や人格形成に責任をもつための手段である。義務教育9年間を通して、学校と家庭・地域が一体となって子どもたちを育成していくために、今後も小中一貫教育を推進していきたい。

はままつの教育は 「人づくり」



静岡県 浜松市教育委員会
副参事 伏見 節子

浜松市の教育目標は、「夢と希望をもって学び続ける『世界にはばたく市民』の育成」である。「世界」には、文字どおりの意味に加え、「夢や希望に向かって追求し続ける自分らしい生き方」という願いも込められている。

この目標を受け、第1次浜松市教育総合計画（平成19～22年度）では、「保育・授業の充実」や「発達支援教育の理念を根幹にした教育」を推進してきた。しかし、子どもを取り巻く環境の変化もあり、自尊心がもてない子ども、うまく人間関係を築けない子ども等、「人」としての大切な部分が薄れていくことを心配する声が聞かれた。そこで、第2次（平成23～26年度）では、「心の耕し」を軸とした、15歳までの一貫した人づくりを推進している。その目指す子どもの姿を、次のように押さえた。

- 夢と希望をもって明るく前向きに生活する子ども
- 目標に向かって最後まで努力する子ども

○互いのよさを認め合うことができる子ども
○社会の一員としての自覚をもった子ども

人づくり三つの柱

本市の掲げる、人づくりの三つの柱は、次のとおりである。

- (1) 「幼児教育」の充実―幼児期にありのままを受容され、愛されることで、人格形成の基礎を培う。
 - (2) 「小中一貫教育」の推進―小・中学校9年間で子どもの学びと育ちをつなぐ。
 - (3) 「学ぼう ふるさとのはままつ」の推進―地域の文化や歴史、伝統、自然、そこに住む人々と関わりを持ちながら、子どもを豊かに育てていく。
- すなわち、15年間を通して、「人としてどう生きていくか？」を、「心の耕し」を軸として、系統的に育てていくものである。市内の全48中学校区それぞれが、「中学卒業時に、このような子どもであってほしい」という「目

指す子どもの姿」を明確に示して、人づくりを推進する。よりよい15歳の姿をイメージし、学校、家庭、地域が共に子どもを導き、育んでいく。特に、15歳までの最も長い時間を占める小・中学校9年間の、「学び」と「育ち」をつなぐ小中一貫教育は、大きな役割を担う。

「学び」をつなぐ

本年度は、『浜松版 小中一貫カリキュラム』を作成し、各校に配布した。これによって、授業者が、各教科・領域の学習の系統性を意識できる。指導すべき内容や、身に付けさせたい学力が明確になり、授業がしやすくなった。また、一貫カリキュラムは、子どもの学びをとらえる物差しともなり、指導の手立てや仕掛けが広がっている。

中学校区ごとの小中合同研修も定着してきている。小・中学校教員の乗り入れ授業を実施している中学校区もある。小学校で、中学の先生から授業を受けた児童は、「中学の先生の授業は、まじめでつまらなそうだと思っていたけれど、とても楽しかった。早く、中学生になりたい。」と感想を述べている。子どもの学びが広がっていることを実感する。

他にも、中学校区ごとに次のような取り組みがなされている。●一貫カリキュラムで系統性を確認し合い、小中学校の教員が互いの授業を参観。●定着度調査の結果を共有して、課題を洗い出し、日々の指導に生かす。●話し合いルールやノートの使い方を統一し、全



◀『はままつマナー』より

9学年を通して学習基礎の定着を図る。●学年ごとに「家庭学習を充実させよう！」という冊子を作成し、学校と家庭が協力して家庭学習の定着を図る。

このようにして、小中一貫教育は、学力形成のうえで効果をあげてきている。小・中学校の教員が、子どもの学びをつなぐ研修を通して親交を深め、情報を共有することで、子どもが安心して学べる教育環境ができてきた。

「育ち」をつなぐ

小中一貫教育のメリットは、義務教育の9年間を見通した、丁寧な人づくりができることである。15歳までに、人としての当たり前のことを、きちんと身に付けさせることも目標の一つである。

浜松市では、全児童・生徒に、冊子『はままつマナー』を配布し、道徳・特別活動や、日常生活での指導に活用している。「しあわせスイッチ自分から」

として、だれもが心地よく過ごせる集団生活を送るためのルールやマナー、エチケット等を、進んで実践できるように指導している。小

学校版には、挨拶や整理整頓等の生活習慣を定着させる内容、中学校版には、「時を守り、

場を清め、礼を正す」という、よりよく生きていくためのマナー等を掲載している。

前章で述べた「学び」と同様に、各中学校区においては、「心の耕し」を意識した、「育ち」の様々な取り組みが行われている。地域と連携しての挨拶運動の実施、児童・生徒がはじめについて協議し、「いじめ撲滅三箇条」を作成、また、「心の教育月間」を設定し、命の教育に取り組むなどである。取り組みを参観した小学校の保護者は、「中学生の姿を見て、わが子の育ちのシミュレーションができた。今後も、子どものよい面を伸ばしてやりたい。」と話す。

また、小学校のクラブ活動に、中学生をゲストティーチャーとして招くなど、児童・生徒の交流学習も増えている。指導を受けた小学生からは、「お姉さんみたいな中学生になりたい」と、憧れを抱く感想が聞かれた。ゲストティーチャーを務めた中学生は、「頼られる責任や、小学生に教える難しさを実感した」と、小学生の手下となる自覚をもてたようである。

人格形成のうえで、各中学校区の実態に合った小中一貫教育が功を奏している。

「学ぼう ふることはままつ」

子どもの生活する地域には、それぞれ素晴らしい歴史、伝統、文化、自然がある。15歳までの子どもたちは、地域で育てられる部分

に活用して子どもを育む「学ぼう ふることはままつ」を推進している。地域の方々と触れ合ったり、地域行事に参加したりすることで、子どもは、「ふるさと」のよさを実感し、地域への愛着をもち、故郷に育った誇りや自信を深めていく。こうして根付く地域への愛着や誇りは、将来、どこの地においても、生き方のバックボーンとなると考える。

音楽会等の行事を、地域と共同実施する中学校区も増えている。その様子は、『学区だより』として、ホームページや町の回覧板等で、地域にも積極的に発信されている。ある学習発表会では、多くの地域の方が参観し、「子どもたちの笑顔がエネルギーになった。」などの感動の声が多く聞かれた。それとともに、「おはよう、おかえり、そんなことしちゃだめだよ、など、変なおばあちゃんと思われる、子どもに声をかけ続けます。」という、地域が積極的に子どもたちと関わろうとする声もあがった。「学ぼう ふることはままつ」は、本市の人づくりの基盤である。

おわりに

各中学校区の取り組みから、義務教育9年間を見通した教育の重みを改めて認識している。本市では、全中学校区で小中一貫教育を行っているが、平成24年4月には、県内初の公立小中一貫校が開校した。今後、市内の小・中学校、そして家庭・地域と、さらにきめ細かい連携・協力を行っていく予定である。

の感じ方の背景にあるものは、地域の方々の生きざまなのだということが、よくわかった。

賤機北小学校では、以前より継続して、地域の特産であるお茶やわさび、花の農家の方々にお話を聞いたり、農作業や農産物の加工を習ったりしている。

その学習の中で、地域の方や保護者の方々は、賤機北地区についての思いや、仕事に対する思いを真摯に話してくださる。

お茶の栽培をしているお父さんの話だ。「本当は、九州の農園のように大規模化したいという夢があった。けれども、山間地である賤機北は、規模では他の地区には勝てない。斜面にある畑で苦労して茶葉を取っていたので、大規模農園にあこがれていたが、この地の気候や土地の特徴を生かして、賤機北だけのすばらしいブランドをつくるのが、今の夢だ。」自分らしいものは何であるかを模索してつくり出そう、という、お父さんの決意、生き方である。わさび栽培では、よいわさびを育てるための種づくりについて詳しくうかがった。自家栽培で代々種を守っている農家もあるし、遠く伊豆から種をもらってきたり、病気にならないように交配したり、よりよい品質の新種を育てることに挑戦している農家もある。お茶農家、わさび農家の方々の努力と心意気に触れ、子どもたちは、自分たちも郷土の誇りである、お茶やわさびにかかわる仕事をしたい、と目を輝かせて語っていた。

単なる知識の吸収にとどまらず、人間の生きざまや、どんな姿勢で仕事に取り組むかを感じ取る。それが何よりも、これから子どもたちの生きる力になるのだと思う。学習とはこういうことなのだ実感しているところである。

『今日がはじまる』には、「青葉あざやか」「水面きらめき」といった歌詞がある。そして、「大地のほほえみ」「大地のぬくもり」という言葉が続く。子どもたちが思い浮かべる「青葉」は、木々の緑でもあり、茶畑の葉や、わさび田の緑でもある。「水面」は、安倍川の流れであったり、わさび田に流れる谷の水が日の光を浴びている様子であったりする。抽象的に「青葉」「水面」をとらえて口に出すのではなく、地域の自然、大人たちの生きざまを聞いてイメージすることで、「ほほえみ」「ぬくもり」という言葉に命が吹き込まれる。そう



して培われた、自分の育った地域への誇りは、自分のアイデンティティーを育てることにつながるだろう。



昨年12月11日、「地域の歌をうたおう会」が開かれ、『今日がはじまる』を子どもたちが歌って、地域の方々にお披露目した。子どもたちに歌った感想を聞くと、4年生の子が「心が折れそうになって、苦しいときでもがんばれる」と言う。「将来遠くへ行っても忘れない」と言う子もいた。子どもたちが成長して進学したとき、大人になったとき、楽しいことばかりではなく、しんどい思いをすることもきっとあるだろう。そんなとき、ふるさとへの誇りを込めた歌を思い出すことは、きっと、培われてきた自己肯定感を呼び起こし、困難の打開に向けてチャレンジする力につながるだろう。

未来を考える大人の姿

「地域の歌をうたおう会」では、地域の方々などによるパネルディスカッションも開かれた。そこでは、賤機北地域の将来に向け、「何か行動していかなければ」という思いが熱く語られた。

子どもたちが、話の内容をすべて理解できたわけではないだろう。しかし、保護者や地域の方がたくさん学校に来て、地域の将来を真剣に語り合っている風景は、きっと記憶に残るはずだ。行政等が何かしてくれるのを待っているだけではいけない、過疎をくい止め、活性化するために、自分たちが何かアクションを起こして、子どもたちのために何ができるか語る。まさに、大人の生きざまを子どもに見せている風景だった。

地域と学校をつなぐために、記念に何かをつくって終わりではない。『今日がはじまる』というタイトルのとおり、歌は、記念品などと違い、自ら声を出す、つまり行動することではじまるものである。地域全体で歌い合い、歌い継いでいくことが、賤機北地域を活性化するために自ら行動する原動力、エネルギーになると確信している。🎵



地域の歌『今日がはじまる』

—ふるさとで育つ子どもたちへの応援歌—

「すばらしい賤北よ 緑わきたつ ふるさとよ」

1年近くの制作期間をかけて、2012年11月、「しずはた賤機北地域の歌 今日がはじまる」が誕生した。

賤機北地域は、静岡市の中心部から車で30分ほど、安倍川を山あいへ遡った地にあり、「しずきた」と呼ばれている。学校のまわりには山の斜面を利用した茶畑が広がっている。また、きれいな谷の水を利用して、わさびの栽培も盛んである。

しかし、近年は過疎化・少子高齢化が進み、20年前に100人ほどいた賤機北小学校の児童は、平成24年度は37人。2・3年生と4・5年生は、複式学級だった。地域の方の、ふるさとを守りたい、元気にしたいという思いも、年々切実になっていた。そんななかで聞こえてきたのが、「賤機北地区のいいところを歌にして、将来につなげたい」「学校と地域をつなげ、子どもたちのために地域に何ができるかを考えたい」といった声だ。

地域の歌『今日がはじまる』には、生まれ育った賤機北地域を誇りに思う心を、未来に向けての出発点としてほしいとの願いが込められているのだ。

前 静岡市立しずはた賤機北小学校 校長(静岡市立長田南小学校 校長) 長野 たかえ 恭江



地域が子どもに責任を負う

賤機北地区では、地域の方が学校によく来られて、何かと協力をしてくださる。校長として赴任して間もないころ、来校した方が「地域が、子どもを育てる責任を負っているんだよね」とおっしゃっていた。とにかく、学校に任せる、学校でしっかりやってくれないと、という風潮もある昨今、賤機北地区では、「地域が子どもを育てる」という意識が根付いているのだ。「学校もしっかりやらないといけない、子どもの育ちで返していくことが、その思いに応えることだ」と、改めて気の引き締まる思いだった。

2012年2月、地域の歌づくりが始動した。歌詞は、児童、地域住民、保護者、教職員から、郷土への思いを言葉に表して寄せられたものを、児童と教職員で何度も検討し、編集した。賤機北の美しい自然、自然や農への感謝など、自分たちが住む地域を愛する言葉が多くつづられていた。また、未来への希望、

将来のふるさとへの思いにあふれており、ここから「はじまる」というイメージが生まれた。この歌を作る



ことが、前向きにふるさとをとらえるスタートラインとなる。そんな思いを皆で共有できて、歌のタイトルは、『今日がはじまる』に決まった。静岡とご縁のあった、作曲家の橋本祥路先生に曲作りをお願いしたところ、快諾していただき、歌詞につづられた賤機北の景色を実際にごらんいただいて、やさしいメロディーの曲ができあがった。

歌詞に込められた、地域への思い

曲ができて、実際に歌わないと完成とはいえない。子どもたちとまず取り組んだのは、歌詞の解釈をしっかりとやっていくことだった。

歌詞についてどう感じるか、どう考えるか、どんなふうに歌いたいか、じっくりと話し合いをした。全校生徒で、さまざまな意見を出し合った。たとえば上手に歌えたとしても、子どもたちが、歌詞を自分のものにし、納得していないと、聴く人に思いは伝わらないし、これから歌い継ごうという気持ちにもならないだろう。1年生から6年生まで、自分はこの部分はこういう思いで歌っている、こんな風景を思い浮かべながら歌うなど、思ったことや解釈を、自分なりの言葉で伝え合った。

子どもたちの話し合いを聞いていて、子どもたち



▲半田市立さくら小学校では、全学年で「南吉学習」に取り組んでいる。3年生は、南吉の作品から文章を選び、かるたを手作り。学年ごとに、調べ学習や童話『花のき村と盗人たち』の劇を演じるなど、様々な作品に親しんでいる。他市から赴任した先生は、「今まで知らなかった南吉の作品を、子どもたちと一緒に読むことができてうれしい。半田市に来てよかった」。

愛知県半田市

にいみなんきち

新美南吉 生誕百年

—『こんぎつね』のふるさとで南吉の思いに触れる—

半田市が生んだ童話作家、新美南吉。18歳の時の作品『こんぎつね』は、現在、小学校のすべての国語教科書に掲載されています。『おじいさんのランプ』『牛をつないだ樫の木』など、知多半島の風土を背景に、心の通い合いや人間の生き方などをテーマとした、数々の名作を残した南吉。2013年は、南吉の生誕から百年。半田市では、市内の全小・中学校で「南吉学習」に取り組んでいます。

童話集で南吉の世界を感じる

半田市では、各小学校に、新美南吉の作品集である「幼年童話集」（低学年向け・10作品）と、「童話集」（中学年以上向け・4作品）を、集団読書テキストとして配置しています。

これらの作品集をつくるにあたっては、市の国語部会の先生たちが、旧かなづかいやカタカナ書きを改め、「幼年童話集」は分かち書きにしました。また、イラストは図工・美術の先生によるものです。半田市の子どもたちは、教科書掲載の『こんぎつね』『あめ玉』の他に、14作品を必ず読むことになります。

「新美南吉記念館」で本物に触れる

教育長の加来正晴先生は、「南吉の作品には、優しさあふれる心の通い合いがストーリー性豊かに描かれています。半田の子どもたちが、多くの作品に親しみ、心の中に南吉作品の世界をどんどん広げていってほしいですね。」と期待を込めています。

1994年に開館した「新美南吉記念館」。半田市内外から、多くの小学生が見学に訪れます。『こんぎつね』に登場する火縄銃や「はりきりあみ」などの現物に触れることで、半田の歴史、昔の暮らしぶりも実感できます。



▲新美南吉。安城高等女学校にて。
(提供 新美南吉記念館)



▶南吉の母校、半田市立岩滑^{いわなぐり}小学校(当時は半田第二尋常小学校)に立つ「権狐」の碑。刻まれている字は、草稿からとった南吉の自筆。岩滑小学校では、南吉が教師を務めた安城高等女学校(現安城高)の跡地に建てられた安城市立桜町小と、「南吉学習」を通しての交流も行っている。

▶右 新美南吉記念館内、「てぶくろをかいに」で子ぎつねが訪れた帽子屋のセット。執筆当時、実際に半田にあった帽子屋さんから寄贈された欄間をはめ込んで作られている。
▶左 南吉生誕百年を記念して制作された、南吉のすべてがわかる図録。記念館で購入できる。(1500円)
▼さくら小学校の5年生。南吉紙芝居を作り、1年生に読み聞かせを行った。「気持ちが変わるように工夫して読みました。」



記念館は、南吉に関する全資料の9割以上を所蔵。直筆の原稿用紙、小学校時代の作文なども展示されています。また、デジタル資料閲覧コーナーでは、『ごんぎつね』草稿の全ページや日記などの貴重な肉筆資料を、タッチモニターで見ることができ、来館者は、時間を忘れて見入っています。

南吉を読み継ぐ、百年後の子ども

記念館の館長、山本英夫さんは、出前授業や、記念館を訪れた子どもたちに、よく、南吉が中学3年のときに書いた日記を紹介します。

『余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでいる。(中略)今から何百何千年後でも、もし余の作品が、認められるなら、余は、そこに再び生きる事が出来る。』

—この文章を小学生にもわかるように話し、こう伝えます。「あなたたちが南吉さんの作品を読んでくれることが、南吉さんのいちばん喜ぶことなんだよ。生誕百年のこの機会に、ぜひじっくり読んでくださいね。」

半田の美しい風景がたくさん登場する、南吉の作品。その中で暮らしていることに思いをはせながら、子どもたちは南吉の世界に入っていくのです。🍎

広島

まんがを通じて 福山の魅力発信を！

福山市教育委員会

福山市教育委員会では、全国に誇れる福山ゆかりの偉人たちに光を当てた、まんが『福山を知ローゼ』を制作しています。『福山を知ローゼ』制作に取り組んだのは、子どもたちが、先人のたゆまぬ努力と英知をもって築きあげられた福山の歴史とその魅力に触れることで、郷土への愛着を深め、誇りをもってほしいという思いからです。福山市の花、ばら（ローズ）にちなんで、「知ローゼ」との名をつけました。

福山の始まりは、江戸時代の初めに、初代藩主「水野勝成」が備後 10 万石の領主として福山城を築城し、この地を福山と命名したことです。水野勝成は、干拓、開墾事業、治水事業と領内の開拓に力を尽くし、現在の福山発展の礎を築きました。その後、松平氏を経て、阿部氏が入封し、福山は城下町として栄えてきました。

城下町として発展した歴史を踏まえ、『福山を知ローゼ』第 1 集の主人公として、幕末の福山藩主で、幕府の老中首座を務めた「阿部正弘」を取り上げました。阿部正弘は、日米和親条約の締結交渉の指揮を執り、日本を長い鎖国から開国へと導き、日本の将来を見据えた政治改革や人材教育を主導し、今日の近代国家の礎を築いた人物です。

『福山を知ローゼ』は、シリーズ化を予定しています。現在、第 2 集として、『山椒魚』『黒い雨』等の代表作で著名な文豪「井伏鱒二」のまんがを制作中であり、2013 年度（平成 25 年度）中の完成を目指しているところです。

第 2 集も、完成後は、市内の公立小学校 5・6 年生各学級に 1 冊ずつ配布するとともに、福山市内の書店等で販売する予定です。ぜひ、このまんがを手にとっていただき、「福山に行ってみよう」と思っただければ幸いです。



●お問い合わせ
福山市教育委員会
社会教育部文化課
TEL: 084-928-1117

長崎

郷土愛を育み、 地域に広がる実践活動

～学校の学びが地域に広がる生物多様性の実践～
南島原市立口之津小学校校長
大野 義満

□ 之津は、島原半島の南部に位置している。ホタルが飛び交い、絶滅危惧種であるカスミサンショウウオ等、様々な生物が生息し、豊かな自然が残っている。

口之津小学校では、平成 24 年度から、長崎県指定の「生物多様性モデル校」として、第 5 学年が取り組みを行っている。総合的な学習の時間を中心に、国語科・道徳などと関連させながら、横断的な学習を計画的に実践している。

総合的な学習の時間には、川の生き物を探索し、子どもたちは、口之津の環境の豊かさを体感した。子どもたちは、探究が進むにつれ、少なくなりつつあるホタルやメダカ、カスミサンショウウオの生態や生息場所、そして、えさとなる生物の生態や生息場所の必要性まで感じ取った。「生物は相互に作用し合って生息をしていく」という「生物多様性」について、たくさんの情報を収集することができた。

また、得た情報を整理・分析し、表現活動として、国語科の単元「効果的に発表しよう」と関連させ、生き物の生態や生息地などをまとめることができた。

その後、環境祭を催す計画を立て、チラシやポスターを作り、地域の方々に口之津の環境のよさを伝えた。環境祭では、川をきれいにする活動の紹介や、ボカシづくり体験、カスミサンショウウオ・ホタル・メダカ等のブースに分かれてのプレゼンテーションなどを行った。

約 300 人来場された地域の方々は、子どもたちの意欲的な活動に感激され、ボカシづくり、川の環境保全などについて、意見が飛び交った。また、「生ゴミをそのまま捨てない、食事の時の残菜を出さない等、まずは、できることから始めていきます。」「口之津の環境について考えるよい機会になりました。」など、うれしい言葉もいただいた。

子どもたちの学びを、地域や生活に広げることができた。環境祭は、これからも継続して、地域の方々とともに口之津環境保全活動として実践し、広げていく予定である。



富山

大阪

キーワードは 「セルフエスティームを高める」

入善町立入善小学校校長
宮崎 新悟

入善小学校は、美しく広がる黒部川扇状地に位置し、139年の歴史と伝統に支えられた学校です。グラウンドのほぼ中央に樹齢100年を超える銀杏の木が凜としてそびえ立つ風景は不思議で、よく話題になります。

少し抽象的な言い方になりますが、「子どもたちにとって楽しい学校」、「教師にとっても楽しくやりがいのある学校」を目指すことを、子どもと教職員で共通理解して、日々の活動を行っています。

最も力を入れているのは授業改善です。学校生活の中核をなす授業が楽しくなければ、学校が楽しいと思えるはずがありません。子どもたちにとっては、「学習内容が理解でき、学ぶ喜びが味わえる授業であること」、教師にとっては、「教え甲斐があり、手応えのある授業ができること」を目標にしています。

授業改善のためのキーワードは、「セルフエスティーム (Self-esteem) を高める」です。セルフエスティームは、自尊心・自尊感情と解されます。セルフエスティームを高めることの大切さや必要性は誰もが感じているが、実際には、できそうでできない、また、やっていそうでやっていないものです。

まずは、子どもたちのセルフエスティームを高める言葉がけや工夫を、授業に意図的に盛り込むように心がけました。また、「楽しくて力の付く授業」のイメージを教師自身ももてるよう、日ごろより実践を積み重ねている先生方を招聘して、本校の児童に対して授業をしていただきました。普段とは違う、生き生きとした姿を見せる子どもたちを目の当たりにし、授業改善の必要性を感じるとともに、自分たちもそのような授業をしたいという意欲をもつことができました。

「セルフエスティームを高める」を大切にして、真摯に取り組みを継続していきたいと考えています。



子どもの笑顔があふれる 学校づくり

前 摂津市立^{あじふ}味生小学校校長
大路 守

味生小学校は、卒業生6千人を超える、創立139年の伝統校です。地域住民に支えられた、温かい支援のある公立の小学校でもあります。しかし、近年、経済的に厳しい生活を余儀なくされ、要保護、準要保護の就学援助を受ける家庭の割合が50%近くになり、また、様々な課題を抱える保護者も増え、安定した家庭生活が送りにくい児童もいます。

児童の現実が厳しければ厳しいほど、公立小学校は学校生活を豊かなものにし、確かな学力を身につけさせ、『生きぬく力』を育てなければなりません。本校ではそのため、すべての児童の学びを支える学習指導をめざし、確かな学力を身につけさせる取り組みを行っています。その一つが、週1時間、全学級で実施する、作文を主とした『文じゅーる』と名づけた授業です。『文じゅーる』の授業は、「文じゅーる!」「ウィー (はい)」という教員と児童の元気な掛け合いで始まります。『文じゅーる』とは、フランス語で「こんにちは」を意味する「ボンジュール」をもじったものであり、児童に苦手意識の強い作文を、楽しく学ぶ授業となっています。

さらにまた、豊かなつながりを生み出す生徒指導にも、全教職員で取り組んでいます。一致した方針のもと、児童生徒支援加配教員を中心に、きめ細かな生徒指導を進めています。その教員が主宰する『いきいき委員会』は、管理職、養護教諭、家庭教育相談員で構成し、児童の登校支援と、学級担任を後方から支援する組織として、重要な役割を果たしています。

このような取り組みを通して、気持ちのそろった教職員集団『チーム味生』をつくることにも情熱を傾けてきました。自分の責任を自覚し、「児童のためにできることはなんでもやろう」という教職員の熱い思いが、学校づくりの出発点ともなっています。

これからも、前向きで活動的な学校文化を育み、児童の「学校が好き!」「教室に行きたい!」という声と、笑顔があふれる学校づくりを進めていきます。





復興に取り組む子どもたち。本シリーズ2回目の今回は、教育現場を支援する活動をご紹介します。

被災地の子どもたちに寄り添って

宮城教育大学 教育復興支援センター特任教授

阿部 芳吉

教育復興支援センターの開設

宮城教育大学では、東日本大震災の直後から、被災地に出かけてのボランティア活動を推奨してきました。ボランティアの数は、届け出のあった分だけで、約230名にのびりました。

震災後の教育現場では、子どもたちの学力低下や心のケア、そして疲労困憊に陥った教職員の支援等が課題となりました。被災地の教育環境課題は、短期間で解決されるのではなく、復旧・復興の過程で、内容が変化し続けながら生じています。これらの解決の一方策として、平成23年6月、本学に教育復興支援センターを開設しました。

子ども、学生が共に育つボランティア

本学では震災直後から、宮城県・仙台市の教育委員会等と緊密な連絡を取り合い、7月からは全国の教員養成系大学にも声をかけて、学生を活用したボランティア活動に励んできました。深刻な津波被害を受けた、仙台市若林区沿岸地域にある市立七郷中学校では、避難所と学校双

方



方の機能を維持するために、体育館を段ボールで九つに区切って授業をすることになりました。学生たちは、教室の環境づくりのため、机や椅子運びなどに汗を流しました。

また、夏休みには、気仙沼市立津谷中学校など、授業の遅れや学習環境等の課題を抱える、多くの学校で学習支援活動を行いました。「生徒たちが自分たちを受け入れてくれるだろうか」という不安を胸に教室に入った学生たちでしたが、子どもたちは人なつっこい笑顔を見せて、気持ちよく歓迎してくれました。勉強が終わると、子どもたちは口をそろえて、「歳が近いこともあって質問しやすく、また丁寧に教えてもらえるのでとても助かりました」「受験についてのアドバイスなどが聞け、とても役に立ちました」などと話してくれました。

学生たちに付き添ってきた先生は、「学生たちは、子どもたちの心の痛みなどを実感でき、将来教壇に立ったとき、これらの体験を十分生かすことができると確信した」と話されていました。私も、ボランティアで汗を流す学生たちが「物事を考えて生きようになった」と痛感しているところだ。

前向きに生きる子どもたち

震災孤児・遺児の子どもたちが、まだ親の死を受け入れられずに苦しんでいる現状があります。また、その一方で、がんばる子どもたちの姿も見られます。例

えば、椿で有名な気仙沼大島の市立大島中学校の生徒たちは、「自分たちのがんばりを地域の人たちにてもらい、元気と笑顔届けたい」と、この春、3年ぶりの開催となった「第30回気仙沼つばきマラソン」の折、お客様に美しい花を披露できるように、早々と準備を始めていました。



仙台市立荒浜小学校では、「将来は、医師になりたい」という子どもの声があがっていました。また、他の学校でも、「命の大切さや、自分の将来を考えるきっかけとなった」など、前向きな声が聞かれるようになりました。

学生たちは、ボランティアから帰ってくると、「やっぱり先生になりたい」という思いを、改めて強く感じるようになっていきます。今後も私たちは、全国の学生たちのネットワークを構築して、未長く被災地の子どもたちに寄り添えるよう、努力の炎を燃やし続ける所存です。

●宮城教育大学 教育復興支援センター

TEL 022-214-3640

<http://fukkoumiyako-u.ac.jp/>

疑似科学との

つきあいかた

第2回



長崎大学教育学部

教授 上蘭 恒太郎 准教授 長島 雅裕

「あの人はA型だから、こんな性格だな」「あの人はB型だから、私とうまくやっていけないのも仕方ない」——「血液型で性格がわかる」、いわゆる血液型性格判断は、日本においては知らない人はいないくらい広がりました。

私たちは、さまざまなやり取りをし、多くの経験を積み重ねながら人間関係をつくっていきます。高度な精神的活動があって初めて可能になることです。これを、血液という単なる物質のレッテルを貼りつけ、「あの人は○型だから……」とパターン分けして、はたして豊かな人間性を認めていると言えるでしょうか。

血液型は遺伝で決まります。人間は、目の色や肌の色など、遺伝で決まることを理由にして、多くの差別をしてきました。血液型も同様です。血液型が発見された20世紀初頭、ヨーロッパの学者たちは、アジア

系人種にはB型がやや多いことを発見し、B型は劣った血液型であるとみなしました。多いと言っても、日本や中国などでB型は2～3割、ヨーロッパでは1割前後ですから、アジアでもB型が少数派であることに変わりありません。差別をしたければ、なんでも理由になるいい例ですね。ちなみに当時ドイツに留学し、日本で最初にA B O式血液型を紹介した原復は、その論文の終わりに性格との関係に触れ、留学先の教授の実験で、動物においては「猿類の最高等なる」チンパンジーにしかA型が見られないと述べています。B型を劣った型とするために動物すら持ち出すのですね。

「会話のきっかけに…」程度と軽く考えることが、実は、差別につながっています。実際、就職時の面接で血液型を尋ねられたという報告もあります。血液型で面接の結果を左右されたら、あまりに不当だと思いませんか。血液型の話で傷ついている人たちがおり、「ブラッドタイプ・ハラスメント」と呼ばれ、警鐘が鳴らされています。

さて、そもそも血液型と性格にはあるのでしょうか？ 実は、心理学者たちによる長年の研究の蓄積があり、大規模な調査によってすでに20年前に、日常生活で「使える」ような強い関係はないことがわかっています。血液型で性格がわかるとされる「常識」と、研究結果は違います。人間がいかに信じやすく、またたまされやすいかを物語っています。現代の心理学では、もはや血液型と性格が関係あるかが問題ではなく、なぜ信じてしまうのかを研究しています。

血液型性格判断は、すでに間違っていることがわかっているのに「正しい」と主張するタイプの疑似科学です。そして、日本といくつかの地域に広がっているだけの話であり、世界に通用する「常識」ではありません。

私たちは、血液型のように「わかりやすい」指標で「わかった気になる」傾向がどうしてもあります。相手の性格をすぐわかった気になれるとは、魅力的な話ですよ。でも、わかった気にさせる話が、科学を装っているときには要注意、です。☹

イラスト ひらた ひさこ <http://kore.mitene.or.jp/~twins7yh/>

第11回

地球となかよしメッセージ

環境保護、動物愛護、異文化交流、伝統文化、友好の輪を広げた体験などを、絵(または写真)と文章で自由に表現して、世界に向け発信してみませんか。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

作品募集
(2013年7月1日
～9月30日)

教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

*第10回(2012年度)作品集のお問い合わせについても、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

ほっとな
出会い

プロ車いすテニス選手

国枝 慎吾 さん

「俺は最強だ！」

僕のラケットには、「俺は最強だ」と書いてあります。2006年、メンタルトレーニングの一環で、「ナンバーワンに『なりたい』ではなく、『なる』と断言しなさい」と指導されたんです。そこで生まれたのが、「俺は最強だ」というフレーズ。選手用レストランで、「アイアム・ナンバーワン」と表現しなさいと言われて、最初は小さな声で言っていたんですが、「もっとしっかりと伝えなければ、自分自身がそう思い込めない」と。周りにライバル選手がたくさんいる中で、当時、世界ランキング10位だった僕ですが、大声で「アイアム・ナンバーワン」と叫びました。コートの外でも、俺は最強というオーラをまとうように振る舞うことが大切だと。

テニスは、心がプレーを左右するスポーツです。だから、試合でメンタルのぶれをどれだけなくせるか、どれだけ自分を奮い立たせられるかが大事なんです。今でも弱気になることはありません。連続でポイントを取られたときなど、もしかしてダブルフォルトするんじゃないかという考えが頭によぎる。それを振り払う言葉が、「俺は最強だ」。ラケットの文字を見ながら口にすると、がらっと気分が変わって、「俺は絶対にできる」と思い込めるんです。

緊張は、五感が研ぎ澄まされている証拠

今でも、誰と試合するときでも緊張します。



試合前の練習でも、一つのミスがやたらと気になり、なんでもうまくいかないのかと、緊張していららうすることもあります。でも、緊張しているのは、五感が研ぎ澄まされている証拠で、実はいいことなんです。例えば、暗闇を歩いていて、後ろから人が近づいてきた時、まだ距離があるのに、足音がクリアに聞こえることがある。それは、緊張しているからこそ聴覚が敏感になっているということ。それと同じで、緊張している、イコール、試合に向けた心の準備ができていくということです。逆に、僕自身は、試合前にリラックスしているほうが怖い。だから、勝負に絶対はない、と自分に言い聞かせて、自分をプレッシャーのなかに追い込みます。

小・中学生の皆さんも、部活動の試合や試験のときに緊張するのは、戦闘準備ができていく合図だととらえると、気持ちの前向きになると思いますよ。

一日一日精一杯生きることが、自分を上げる

僕は、小学4年の時に脊髄腫瘍という大病を患いましたが、友達や皆、病気の後も後も少しも変わらず仲よくしてくれました。千葉の柏市にずっと住んでいます。柏には小学校の頃から友達もたくさんいて、海外遠征から帰ってくると、本当にほっとします。市民の方々にも、応援してよと声をかけてもらって、本当にうれしくなります。アイラブ柏です(笑)。

中学3年の時に、初めて母から、自分が癌だったと知らされたんです。その時、本当に生きていくことに感謝し、一日一日を精一杯生きようと思いを新たにしました。その思いが、今の、世界ランキング1位という自分をつくったと考えています。

これから最もやりたいことの一つとして、車いすテニス界への恩返しがあります。プロの道に進んだ目的の一つが、後進の育成です。マイナースポーツは皆そうだと思いますが、試合に出るほど、経済的に厳しくなる。そういう状況を打破しないと、本気で車いすテニスに取り組みたい子は出てきません。僕がプロになり、世界一になることで、スポンサーがついて、経済的な心配もなくなる。僕が成功例となることで、これから世界一をめざす子たちの励みになるはずだと。だから、絶対に失敗できないという覚悟をもっていきます。勝ち続けることが、自分の一番の仕事だと、常々、自分に言い聞かせているんです。

くになだ しんご 1984年生まれ、千葉県柏市在住。9歳の時に脊髄腫瘍により車いす生活になる。11歳から車いすテニスを始め、17歳から本格的に海外ツアーを回る。アテネパラリンピックでダブルス金メダル、北京パラリンピックでシングルス金メダル、ダブルス銅メダル。2009年プロ転向。ロンドンパラリンピックでシングルス金メダルの連覇。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭の、野茂英雄さんのお話に共感。選手に自立してほしいと求め、本当のものをつかんでほしいと願い、上に立つ人がまず自立しなければと指摘されている。本物志向、自立志向が、指導的な立場にある人に求められているように思います。(愛知県 青木三芳) ◆岩手県大船渡市の末崎中学校。地域復興のために「わかめ学習」を再開した経緯、1年から3年までの計画性のある取り組みに感動しました。生徒たちに、地域の誇り、復興への心を強く持たせる生きた教育活動であったと確信します。(北海道 瀬波金直) ◆「きょういく見聞録」の新潟県土樽小学校。全国いたるところで、学校の統廃合問題が起こっていますが、湯沢町の実践は、同じ課題をもつ地域に大きな示唆を与える実践だと思います。地域コーディネーターのかかわりは、「地域の風が行き交う学校」という視点からも、全国で推進していくべきでしょう。(沖縄県 上地幸市)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。